

2014-15 年度 R I のテーマ「ロータリーに輝きを」
R I 会長 ゲイリー・C. K. ホアン (Light Up Rotary)

八戸南ロータリークラブ会報



●ガバナー 工藤 武重 ●会長 榎 清蔵 ●幹事 伊藤 斉 ●コミュニケーション委員長 米内 安芸

ホームページ : <http://www.hi-net.ne.jp/~hsrclub/>

Email : hsrclub-2830@cd.hi-net.ne.jp

RI 第 2830 地区ホームページ : <http://www.rotary-aomori.org/2014/>

第 1915 回例会記録《ゲストスピーチ例会》

2015 年 1 月 22 日 (木) 点鐘 12:30

レポート No. 1348

四つのテスト

言行はこれに照らしてから

- 1) 真実か どうか
- 2) みんなに公平か
- 3) 好意と友情を深めるか
- 4) みんなのためになるか どうか

第 1915 回例会要旨

- ・会長要件
- ・幹事報告
- ・各委員会報告
《出席・親睦・国際奉仕》
- ・ゲストスピーチ



熊谷 S A A



《出席報告》桜田委員長

正会員数 43 名。本日の出席は免除会員 5 名を含む 26 名。出席率 70% です。前々会の例会は、新年互礼例会でした。

《ゲスト》

八戸商工会議所会頭 福島 哲男 様 (八戸 RC)

《会長要件》榎会長

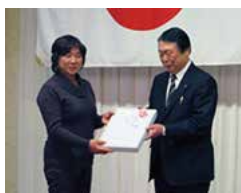


先週の金曜日に三八五グループ様からのご招待で新年の祝賀会に参加して参りました。グループ企業の方、来賓の方、取引の方々を含め 350 名くらいの参加でしたが、お出迎えから席についた後の接待の仕方など、管理職の方々の立ち居振る舞いがすごいと感じてきました。私たちが今年 40 周年という事業がありますが迎え入れの方法とか来客者に対しての接客の仕方など参考になりました。又、各企業全部の事業報告などもあり大企業グループの中にいると言う事が改めて社員の人たちの団結する思いを強くするのではと上級管理職の方々の振る舞いを見て思いました。私たちのクラブにも経験のある人たちがたくさんいらっしゃいますので、そういう人たちの知恵袋が大事だなと思いました。先輩方が 40 年かけて作られてきたクラブですが、今後は若い人たちや、最近入られた方とも融合し、40 周年を契機としてさらに良いクラブになっていければ良いと思っています。改めて経験豊かな方々の力は凄いと感じる会でしたのでクラブにも取り入れたいと思います。

本人誕生日



三川会員



田守会員



《幹事報告》伊藤幹事

・先週お伝えした新会員候補の山村雅雄さんについてどなたからもご異議がありませんでしたので山村さんの入会は認められました。

・先程会長がお話ししましたが三八五グループ様から新年会のお礼状が届いています。

・例会変更のお知らせです。八戸 RC 2 月 11 日 (水・祝) 休会 (メーキャップ不可) 2 月 18 日 (水) 時間変更、八戸東 RC 2 月 13 日 (金) 時間場所変更、八戸北 RC 2 月 24 日 (火) 時間変更

・ザ・ロータリアン誌が届いています。

《ニコニコボックス》平光委員長

榎会長 : 福島会頭様、本日は宜しくお願いします。

伊藤幹事 : 福島さま、今日はよろしくお願ひします。

赤穂副会長 : 福島様よろしくお願ひ致します。

平光会員 : 福島様よろしくお願ひします。長嶺さん、三味線の CD ありがとございました。

本人誕生日 : 三川会員、田守会員

奥様誕生日 : 三浦晃会員



《国際奉仕委員会》久保田委員長

かねてより皆さんにお話しておりました福島会頭様の卓話が実現の運びとなりました。国際奉仕委員会としては国際的な問題もそうですが、日本は漁業国であり、八戸は水産の町という事を含めて、水産の代表的企業であります福島漁業の代表であり、商工業の中心的役割を果たしております商工会議所の会頭を務めていらっ



います福島様より卓話を頂戴して、漁業及び地場の問題、そして近隣諸国との漁業をめぐる問題などを含めてお話して頂きたいと思えます。30 分の短い時間ですがよろしくお願ひ致します。

《ゲストスピーチ》福島哲男様



久保田さんから卓話の話を頂いたとき私はロータリーのメンバーではございませんでした。それから数日後に八戸 RC の私の先輩である前会頭の橋本昭一様と、もう一方佐々木克郎様から八戸 RC に入りなさいと言われて 1 月 14 日に承認をいただいた新参者で、ロータリーの事は分かりませんが、これから勉強させていただきたいと思えますのでよろしくお願ひ致します。

それではお手元の資料に沿ってお話させていただきます。八戸の今現在の所属漁船の数は年々減っております、私が学校を卒業して漁業界に飛び込んだ昭和 39 年、今からちょうど 50 年前ですが、そのころから見ますと激減しています。例えばいかつりの中型船が 28 隻と有りますが、昭和 45 年に農林水産大臣から承認をもらったのは 475 隻でした。それが現在 28 プラス 2 しかありません。いかに八戸港の在籍船が減ったかという事がお分かりいただけると思えます。他の船についてはいかつり船程の減り方ではございませんが減っていることに変わりはありません。その中であって大臣許可と知事許可という漁業の枠があり、知事許可の海域を上回るのが大臣許可なのですがそういう船も年々減って参りまして、どれからお話していか分かりませんが、大臣許可の中に遠洋底引き網を許可するとありますが、これも昭和 40 年代には 21 ありました。最近では丸一河村開洋丸さんという方の船が一隻入っています。どこに魚を捕りに行っているかというと殆どインド洋か天皇海山で近くではありません。昔はロシア海域が操業海域の中に認められていました。200 海里規制が出来る前はソビエトのロシア海域で操業できていたのですが、今は全く撤退してロシアの海での操業は認められていません。先程久保田さんから海外の話にも触れて下さいと言われてましたが、ロシアのみならず色々な海域に魚を求めて出て行った八戸港の所属船がどんどん撤退しゼロになったのがかなりあります。今、一つ残っているのがニュージーランドに出漁している大型のいかつり船がございますが、今朝の我々の業界紙のニュースを見たところ、ニュージーランド政府そのものが、自国の出資した会社に籍を置かなければ日本から直接来て魚を捕る事は認めないように法律の改正をするという事が載っていました。このようにすべての国が日本から出漁している船に外圧を掛けてまいりました。今から 10 年ほど前のフォークランド戦争が収まった時にあの海域に八戸港からも 20 数隻出漁していました。全国からは 150 数隻ありましたがそれらも徐々に切られていきまして最後まで操業されたのが熊谷拓治さんが経営された船でしたが、これも向こうの政府の方針に従わざるを得ず撤退しました。これがアルゼンチンの沖です。この前後にペルー沖での操業も同じような形態をたどり撤退をせざるを得なくなり

今ではアルゼンチンもゼロ、ペルーもゼロで今は先程お話したニュージーランドが一隻だけ残っています。ロシアはもちろんゼロで八戸の港が栄えてきた裏付けであったところの水産業の漁船漁業がどんどん衰退しているのが現状であります。一口に漁業、水産業と言いますが私はこれを分類して捕る商売を漁船漁業、捕ったものを流通に乗せて加工する商売を水産業と自分なりに分かりやすく分類しています。どちらの業も捕るものが減っていますので当然の事ですが水産業に携わっていただいている従業員の人たち、それを囲む色々な商売の人たちも当然ながら減って参りました。一番ピークの際は 200 海里が施行されました昭和 52 年前後で、八戸市内の水産業に従事してくれる人が約 18,000 人から 19,000 人位と言われていましたが、いまは全体で 2,000 人あるかないかというくらい減っております。資料にもありますが水揚げの推移という所を見て頂ければ分かりますが昭和 4 年から載っていますが大雑把に言いますと右肩上がりです。推移して年々増えて参りました。一昨年だったと思えますが八戸港の水揚げが 10 万トンを超えたのが 59 年ぶりという事で、逆算しますと昭和 29 年の年に近いくらいに戻ってしまいました。その間どんどん伸びてきた数字の中で、昭和 41 年、42 年、43 年は何と数量では日本一の水揚げを誇った時代もありました。これを丁度契機とした訳ではありませんが、ここからどんどんと水揚げの数量あるいは金額というものが増えてまいりました。そのころの国内の全体的な総生産量は 1,100 万トンから 1,200 万トン位と言われた時代もありましたが、昨今ではその半分くらいの 540 万トンから 550 万トンと言われていています。1,000 万トンの水揚げをしたときは当然ながら世界でナンバーワンの時代でした。そういう時代が数年続いた時代もありましたが、外圧が加わりまして出漁していた船がその海域で捕れなくなった、捕ろうとしても色々な制約を受けてやれなくなったと言う事が事実であります。そういう中にありまして、水揚げされたものを買って、それを製造して加工して販売するという立場の商売の方々には原料がない訳ですから仕事がだんだん縮小されるわけで、海外からの輸入水産物というものに手を出して何年かはそれで支えられたこともあったのですが、最近は鳥インフルエンザとか狂牛病問題とかがヨーロッパ地方で出回るようになりましてから、海外での食が肉から魚に変わるという環境に変化し、中々日本まで水産物の輸入が思うように入ってこなくなりました。これは 20 年程前からですが、益々最近ではそれが厳しくなってきました。そういう中であって同じ水産に携わる、加工する立場の人は原料の入手が困難であります。国内からも入ってこない、海外からの輸入も狭められてきていると言うのが現状であります。そういう中であって逆に今度は海外の船が日本の 200 海里の外で操業するという形態がここ 7～8 年前から非常に顕著になって参りまして、特に台湾の国の船が北太平洋の海でサンマの操業に着手しています。かつて北洋という所は日本でも、母船式船団操業というのをやったことがあり、これはサケマスですがこれを真似た訳ではないでしょうがサンマの母船式船団というのを 7～8

年前から考案して操業しています。母船の規模は大きいものですから、聞いた話ですが 2,000 トン位の船でヘリコプターを 2 基くらい積んで空から漁場を探索し、魚群を見つけてサンマを捕獲しているという事です。日本の場合はサンマに限って言いますと解禁日というものがありまして〇月〇日からこの規模の船は出漁していいですよ、それ以外の船は〇月〇日からやりなさいと言うように漁業許可、大臣許可の仕組みがありますが、海外の船に対してはそのような制約は出来ませんので好き勝手にやらせるよりしょうがない、しかも 200 海里の外ですから日本の権限が及ぶ海域ではありません。先捕りをされるわけですからサンマもだんだん魚体が細かくなりました。資源は無限ではなく有限ですから、捕って、捕って、捕れば最後は無くなるかもしれませんが今の所無くなるまでは行ってはいませんが非常に小型化して、今年の例を見ますと日本のサンマ船は 8 月に農林水産大臣から許可を頂いて出漁するという時に至ってもサンマは日本の北海道近海に近づいてこない、先に捕られてしまうので日本に来る群れが少なくなっていて、サンマの値段もそういう事で乱高下が激しかったのですが、同じような事がサケマスにも言えます。サケも今年は北海道沿岸に近づいてきたのは遅かった、そこで定置網とかサケを捕る業者は非常に困惑したと言うのが昨年の暮れ、つい直近の事でございます。そういう中にありまして今現在、我が八戸の港はどうかと言いますとサバを何としても利用して、これでそれぞれの企業の中核を成せるようにしようと皆さん頑張っておられるのですが、サバに関しましては平成 15 年の秋から「資源回復計画」というものに沿って、どういう事かと言いますと先ほど申し上げたように資源は有限ですから、いつまでも永続的に捕れるように、サバの世代がどんどん変わって子供が生まれてまいります、それをうまく利用して大体 4 年位で親になると言われていますのでその所を調整しながら漁獲するべきだと言うのが国から示されまして、今現在その方式でやらせてもらっています。そのおかげでサバの資源は安定的に漁獲されているのではないかと思います。サバについては先程お話したように太平洋の 200 海里の沖に行ったことはありませんが、あまりそちらの方で捕れたという話は聞いたことがございません。ほとんど日本周辺の太平洋にしても日本海にしても、この島回りで回遊して餌を追いかけ成長していくのがサバの性格のようでサンマとかサケとはちょっと違っているようですから、資源に対する外圧がある程度抑えることによって安定的に続ける事が出来るのではないかと、自分でやっている商売ですから直接それに関わっておりますので私もその事は非常に良い事だなと考えております。そういう中にありましてこれからもそういう方式を採用しながら水揚げを安定的に、何も日本一の数量を捕るのではなく中身の濃い、付加価値付けの出来るやり方で資源とのつり合いを取りながら仕事を続けて行くのが残された道としては安全なところではないかと思っています。昨年の全国の水揚げの数量だけを見ますと八戸港は第 4 位となっております、千葉県の水揚げが倍以上

の水揚げで 1 位です。千葉県の水揚げはこの所銚子が連続日本一ですがこれは房総半島の周辺を暖流と寒流がぶつかりあって非常に良い漁場が形成されていて、その為に魚も沢山そこに集結しているからと言われております。かつてはこの三陸沖が世界の三大漁場で私たちが学校で勉強させてもらった時には色々な種類の魚が沢山集まる所だと教わりました。本当にその通りで先程 50 年前の話をしましたが、あのころは色々な種類の魚がこの三陸沖には集まっておりました。何故かここ数年、サバに例えてお話しすると八戸沖にはサバが集結しなくなった、理由は分かりません。何故かという質問をされたときは、私はサバと話が出来る機械がないのかとよく言います。サバを探る魚群探知機、或はソナーという機械はありますが直接話しかける機械はありません。水産の資源学者の皆さんにお話を伺いますと温暖化のせいですが、まず一つはそれが言えます、これからは今まで捕れていた魚種、いろんな魚が必ずしも数年前と同じような事がないと思えますというような話でした。今朝の新聞にも書いてありましたがサクランボでもリングでもだんだん北の方に移っている、海だけでなく陸でもそうなっていると書かれていました。そういう事で相手も生き物ですから当然自分たちの子孫を減らさないようにして増やしていこうと言う事はあると思えます。そういう中であってそれに携わる第一線の立場の人達が今後どのような方策、方針を立てながら事業を展開していくかという事がこれから大きな課題になってくるのではないかと、ようするに今まで数十年やってきたことをそのままお手本にしてやっていいよと言う事が必ずしもないのではないかと、最近つくづく考える一人でございます。将来的なことは、誰もこうなりますよと言う事は断言できない訳ですがさっき私が話したように、振り返ってみて 50 年という歴史の中であって今はサバが捕れていますが、50 年前にはサバは捕れていませんでした。何が捕れていたかという、大した数量ではありませんでしたが高級魚のメヌケやキチジ、こういうものが数量の中のかなりを占めていました。そういう時代を 10 年ちょっと過ぎたあたりからスルメイカが大量に捕れるようになりました。大量に捕れ過ぎたために笑い話かもしれませんが、本当の話で入れる容器の方が中のスルメイカより値段が高くなりました。それ以来昭和 40 年の初め頃だったと思えますがスルメイカを販売するに当たっては箱付販売と言いまして中身だけでなく箱の値段を付けて買ってくださいと言う事になりこれは今現在も採用されています。キチジ、メヌケがスルメイカに変わりそしてスルメイカが資源的に枯渇してきたとき、ちょうどその頃が先程お話した四百数十隻あった時代ですが、活路を求めてニュージーランド、或はフォークランド、或はペルーに漁を求めて出て行った訳です。そしてその後何が捕れたかと言いますとイワシが捕れました。イワシが当時 1,100 万トンの全体の数字の中で 400 万トン捕れたのが昭和 50 年代の終わりでした。それからサバが変わって捕れはじめ、先ほど言いましたように「資源回復計画」というものを作らないとすべて今までそうだったように

無くなるのではないですか、これからはそういう方針で漁に向かうべきではないですかという事から今現在はそういう道をたどっている訳でございます。漁師というのはどちらかと言いますと、今そこを泳いでいた魚を今捕らないと、明日という訳にはいかない、「そこを歩いていたら親の仇を直ぐ討て」ということわざもありますが、そういう気持ちが強いものですから、それではだめだと言う事で今は一つの計画を立てながら事業と取り組んでいるという状況

であります。最後になりますますが海外との話をしますと今まで非常に仲良くやってきました日本の九州方面の東シナ海では中国の漁船が非常に勢力活発に動いていて、日本の先ほど申し上げた親の仇を討つようなやり方を、今は中国の漁船がやっていると言うふうに、噂としては流れてきています。だけれども接した海で日本も韓国も中国も仲よく魚を捕っていかなければならない時代に直面していることを申し上げてお話を終わらせていただきます。